



Title	計量語彙論と国語語彙史研究
Author(s)	前田, 富祺
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1988, 22, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/50004">https://hdl.handle.net/11094/50004</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 計量語彙論と国語語彙史研究

前 田 富 祺

一

語彙研究にはいろいろな立場が考えられるが、集合としての語彙を考える立場と体系としての語彙を考える立場とはもっとも重要なものとして挙げられよう。<sup>(1)</sup> 田中章夫は、前者を計量語彙論（語彙の総量の推定や、統計的な性格についての研究）とし、後者を語彙体系論（語彙の体系的な組成についての研究）と呼んでいる。<sup>(2)</sup> 当然、国語語彙史を考える場合にも、語彙の体系の変遷として考える立場と語彙の量的構造の変遷として考える立場とがあっても良いはずである。私自身はそのうち語彙の体系としての国語語彙史を考えることに微力を尽してきた。<sup>(3)</sup> 国語語彙史研究も全体としてそのような方向の研究が多く、体系としての国語語彙史については全時代にわたってある程度の見通しを付けることが可能となった。しかし、体系としての国語語彙史研究に比して、計量的な立場からの国語語彙史研究の進展はあまりはかばかしくないように思われる。

昭和五十年ごろ、国語語彙史のまとめを行った時には私自身としては、なお全体的な見通しをつけることが出来

なかった。<sup>(5)</sup>しかし、昭和六十年に『言語学大辞典』の「日本語」の「歴史日本語（語彙）」を執筆した際にはやや全体についての構想を考えることが出来た。そこでは、私は、第一章「語彙の変遷の概観と時代区分」、第二章「語彙構成から見た語彙の変遷」、第三章「語彙の量的構造の変遷」、第四章「位相語彙の変遷」、第五章「外国語の借用」、第六章「意味分野から見た語彙の変遷」の六章に分けて概観してみたのである。もちろん、それぞれの章において問題となる場所が多かったのであるが、特に「語彙の量的構造の変遷」を概観するにはなはだ困難を感じた。その理由の一つは、そのような研究が上代・中古と現代に偏っていて中世・近世が欠けているために国語語彙史として総合することが出来ないことであり、もう一つは、それらの研究方法によって果して語彙の全体を見通すことが出来るか（それぞれの資料の文体的な違いを明らかにするのにとどまるのではないか）ということである。この原稿は一度初稿まで進んでいたのであるが、紙数の関係で全体を縮少してまとめ直すこととなり、「語彙の量的構造の変遷」の部分は省略することとしたのである。そこで、その内容については他に引用したこともあり、また国語語彙史を量的構造の面から考えることについての様々な疑問が依然として残っていることもあり、計量語彙論から見た国語語彙史研究の現状を私なりに整理しておく必要を感じているので、この機会に書き直して発表することとした。田中章夫が国語語彙史研究のために語彙量・順位についての論考をまとめてくれたことは有難いことであった。しかし、近年いちじるしく進んでいるコンピュータを使つての語彙研究や因子分析・統計学などの数理的な処理を伴う研究はなお現代を対象とするものが多く、国語語彙史研究に関わるものはあまりない。国語語彙史研究にも計量語彙論的な研究の試みになることを期待し、本稿がその出発点となればと思つてゐるのである。<sup>(7)</sup>

## 二

計量語彙論的な研究の方法は、国立国語研究所における現代日本語の研究で始まったと言って良い。国立国語研究所を中心とする語彙調査については、中野洋の整理があり、また、田中章夫の著書にも説明されている。<sup>(8)</sup>その後の研究の流れは『計量国語学』所収の論考によって見ることが出来る。しかし、現段階における計量語彙論の全体については、やはり、水谷静夫『朝倉日本語新講座2語彙』<sup>(10)</sup>から出発すべきであろう。計量語彙論的な研究の一はそれらに譲ってここで触れることはしないが、パンチカードの段階からコンピュータの段階に入って現代日本語の計量語彙論的な研究は著しい進展を遂げていることが明らかである。しかし、先にも述べたように、国語語彙史においては計量語彙論的な研究は必ずしも十分には行われていない。

国語語彙史における計量語彙論的な研究の出発は比較的早く、大野晋の研究が挙げられる。<sup>(11)</sup>この論考の題名によっても窺えるごとく、大野晋はこの研究によって古典文学作品の基本語彙を明らかにすることを第一の目的としていた。大野晋は、日本の古典文学作品を、(i)『万葉集』、(ii)随筆グループ(『徒然草』、『方丈記』、『枕草子』)、(iii)日記グループ(『土佐日記』、『紫式部日記』、『讃岐典侍日記』)、(iv)物語グループ(『竹取物語』、『源氏物語』)の四つに分け、各品詞の比率を検討している。その結論は、

(1) 名詞の比率は、万葉集、随筆グループ、日記グループ、物語グループの順で減少する。

(2) 形容動詞の比率は、万葉集、土佐日記、竹取物語、方丈記、徒然草において低い比率を示している。それは、奈良朝語及び漢文訓読系の言語において形容動詞が少ないことを反映する。枕草子、源氏物語、紫式部

日記、讃岐典侍日記においては高い比率を示している。それは平安朝の女流文学語においては形容動詞が多く用いられていることを示すものである。

(3) 形容詞の比率は、名詞と反対に、万葉集、随筆グループ、日記グループ、物語グループの順で増大する。

(4) 動詞の比率も、名詞と反対に、万葉集、随筆グループ、日記グループ、物語グループの順で増大する。

(5) 「その他」にふくまれる語の比率は各作品において、作品の言語量の大小に関せず大体一定した比率を保っている。

のようにまとめられている。

なお、現代日本語についてのこのような調査は樺島忠夫によって大野晋の調査よりも先に行われた。<sup>(12)</sup> 樺島忠夫は、

現代日本語の表現域(但し助詞・助動詞を除いて考える)で、名詞の構成比をN、動詞の構成比をV、形容詞・形容動詞・副詞・連体詞の構成比をA、接統詞・感動詞の構成比をIとすれば、近似的に

$$A = a - bN, \quad I = cN - d, \quad V = 1 - (N + A + I);$$

ここにa、b、c、dは統計的に決まる定数である。

のようにまとめている。

これらの研究の数理的な検討は、水谷静夫によってなされた。<sup>(14)</sup> これらの研究の数理的妥当性についての検討は私のよくするところではない。ただ、宮島達夫、<sup>(15)</sup> 山口仲美、<sup>(16)</sup> 神尾暢子等によって大野晋の調査についての修正、批判のあることは付け加えておくべきであろう。

これらの研究によって明らかにされた事実は、資料の性格の問題であり、文体的な語彙の違いが中心となってくる。『万葉集』と『源氏物語』との相違が明らかにされるとしても、それは時代的な差ではなく、文体的な違いと考えられるのである。大野晋の研究の後、古典文学作品の語彙を品詞別に分けて考える研究は、竹内美智子、伊牟田経久、稲賀敬二等によって試みられ、主として中古の文学作品の文体的な特色を明らかにすることに役立ってきたのである。しかし、作品の語彙の量的構造は作品の内容に関わるものであるとともに、時代的な制約を受けているはずのものである。ただ、どの部分が文体的な特色であり、どの部分が時代的な特色であるかを見分けてゆくことは困難なのである。

大野晋は、日本の代表的な古典である『万葉集』、『枕草子』、『源氏物語』、『徒然草』の四作品に共通に現れる単語八五一語をさらに『類聚名義抄』の語彙と比較し、これと共通なもの七〇六語を取り出して、これを日本の古典語の中のもっとも基礎的な語彙であるとした。<sup>(18)</sup>この七〇六語が現代語の中にどの程度残っているかを調べて、語彙の通時的な変化を明らかにしようとしている。大野晋は、それらの語彙を、

(A) 古典語と同じ意味で、現代東京語の日常語として使われているもの

(B) 日常語として使わないもの

(C) 別の意味となつて使われているもの

の三種に分類した。大野晋によれば、(A)が五三三語(七五・五パーセント)、(B)が一五三語(二一・七パーセント)、(C)が二〇語(二・八パーセント)であるとし、更に、名詞、形容詞、動詞などに分けて、それぞれの残存率を比較している。それによれば、形容詞の類は残存率がやや低く、他に比して変化しやすいのに対し、動詞は比較的安

定していると言う。

この場合、どういう基準で(A)(B)(C)に分けるのか、残存率の違いで問題としている形容詞・動詞などの分類は品詞としての目安なのか語彙論的基準なのか、語という単位の認定はどのようなのかなど、様々な疑問が出る。ただ、見通しをつけるという点で役に立つものであることは確かであるし、また大野晋の言うように、古典語の基本語彙を定め国語教育に資する面のあることも明らかである。しかし、私などの立場から言えば、このような研究が国語語彙史を考えることに連なるかどうかということが一番の関心である。そのような面から考えると、第一には品詞分類というようなことはより語彙の用法・機能に近い立場から見直すべきことであり、第二には文学作品というような枠をこえた時代的な語彙の性格を考えるための資料の考え方が必要であり、第三には中世・近世などの資料をも合わせて考えてゆくような立場が必要であるように思われるのである。

### 三

同じく語彙の量的構造を考えるとしても、語彙を意味分野に分け、意味分野ごとにそこに所属する語彙の量を比較するような考え方もありうる。この場合の意味分野の考え方としては、国立国語研究所編『分類語彙表』を利用する場合が多かった。

たとえば、阪倉篤義は、国立国語研究所編『分類語彙表』を参照して、『万葉集』の和歌に用いられた名詞の意味分布を調査しておられる。<sup>(20)</sup>それによれば、植物に関する語彙が全語数の一三・三パーセントでもっとも多く、天体・地勢に関するものが一〇・七パーセントでこれに次ぐと言う。これは、上代においては自然を相手とする生活

をする人々の多かったことを反映しているのである。また、阪倉篤義は同様な調査を『古今集』についても行っている。そして、『万葉集』と『古今集』とを対照すると、

古今集の世界は、万葉集にくらべて、人間活動の主体は、よりせまく限られ、その目は周辺の生産物よりは、むしろ自然界ないしは時間の推移などの、やや抽象的な事柄に向けられることが多かったと言えるのではあるまいか。古今集に比して万葉集の世界は、やはりいろんな意味において、広く、かつ具体的であったと言うことが出来るようである。

とまとめておられる。

この後も、意味分野に分けて文学作品の語彙の量的構造を対照する研究が進められてきた。たとえば、伊牟田経久は、『源氏物語』と『蜻蛉日記』の語彙を名詞に限って対照し量的構造の違いを考察しておられるし、浅見徹は、『後撰集』、『土佐日記』、『竹取物語』の語彙の意味分野に分けての量的構造を延べ語数、異なり語数の両面から研究しておられる。<sup>(22)</sup>

現代語においても、様々な分野の資料について『分類語彙表』を参照しての意味分野における量的構造の違いを考察した研究がある。私どもも、幼児の語彙発達を考える時に成人の語彙との違いを明らかにするために、『分類語彙表』を参照してみたことがある。<sup>(23)</sup>

これらの研究を国語語彙史の形で総合するためにも様々な問題がある。これまでに調査された資料の数があまり多くないことは言うまでもない。その点は今後補われるものとしてもっと基本的な問題が残っているのである。文学作品が何らかの文学的な意図をもってまとめられている以上、そこに使われている語彙の性格は時代的な制約



とともに内容的な制約を受けていることは当然であろう。したがって、歌集の語彙の量的構造と物語の語彙の量的構造とが異なっているのは、それぞれの対象となっている世界が異なるからだとも言えるのである。更にテーマの点で似通っているとしても、その違いを考えることがただちに時代的な違いを考えることにはならない。背景となっている語彙構造が変わっていない場合でも、文学観の変化がどういう語彙を多く使うかに影響してくるはずである。自然主義文学の意味分野による語彙の量的構造とプロレタリア文学の意味分野による語彙の量的構造との違いを考えるような場合を考えてみると良い。品詞に分けての量的構造を考える場合以上に、文体的な違いも大きな影響を及ぼすはずである。

次には『分類語彙表』を使うということがどういう意味を持つかということも問題である。『分類語彙表』というのは現代日本語を考えるためのシソーラスである。その枠組みというものが、国語語彙史を考えるために適当なものかどうかということは考えてゆく必要がある。もちろん比較対照ということではある程度は便宜によらざるをえない。各時代各時代の語彙を考えるためにふさわしい意味分野を考えるとすれば、時代ごとに異なる枠組みを考えることになり、比較することが出来なくなってしまう。それにしても、むしろ中世あたりを中心にして考える方が上代から現代にわたる国語語彙史を考える枠組みとしては適当でないかなどというような反省はあってもおかしくないように思うのである。<sup>(24)</sup>

第三には、『分類語彙表』やシソーラスについての考え方の問題である。『分類語彙表』については、私も何度か問題にしたことがある。<sup>(25)</sup> もちろん、関連させて考えられるべきものではあるが、本来、語彙を分類することとシソーラスを作ること、語彙の体系を考えることは別のことであるはずである。国語語彙史を考えるために語彙を意味

分野で考えるためには、範時的な意味分野の枠組みを考える必要がある。シソーラス自体はどういう目的によって作られることによって変わってくるものであろう。もし語彙の体系を考えるためにシソーラスを作るとすればそれはそれなりに有用であらうが、『分類語彙表』とはまた違った形のものにしてゆく必要がある。いずれにせよ、語彙分類ということとシソーラスについての論議は少なすぎるように思われる。シソーラスについては、荻野綱男の検討があるが、<sup>26)</sup>国語語彙史を考えるためには、どのような国語語彙史を頭においてシソーラスを利用するのかということも合わせ考える必要がある。語彙分類ということは、すべての要素をいくつかの分類に所属せしめれば良いので、語彙全体を演繹的に考えることになり、一々の要素同士の関わりを問題にするわけではない。一方、語彙体系では一々の要素の位置づけ配列が問題になるべきものと考えられるのである。

いずれにしても、意味分野に分けて語彙の量的構造を考え、その変遷として国語語彙史を考えるためにはなお考へるべき多くの問題が残されているように思われる。あるいは、基本語彙的なものの中でのみ考へてゆくということも考へられようし、これまでのような異なり語を中心とするものではなく、延べ語を中心とする方が考へやすいということもありえようかと思われる。

#### 四

語種に分けて量的構造を考へるという立場も考へられる。つまり、国語語彙史を和語・漢語・外来語・混種語などの語種の量的構造の変遷として考へることになる。単純化して言えば、時代とともに次第に和語の比率が下がり、他方、漢語・外来語・混種語の比率が上がる（細かに言えば漢語の比率は中世ごろから高くなりだし、近代に

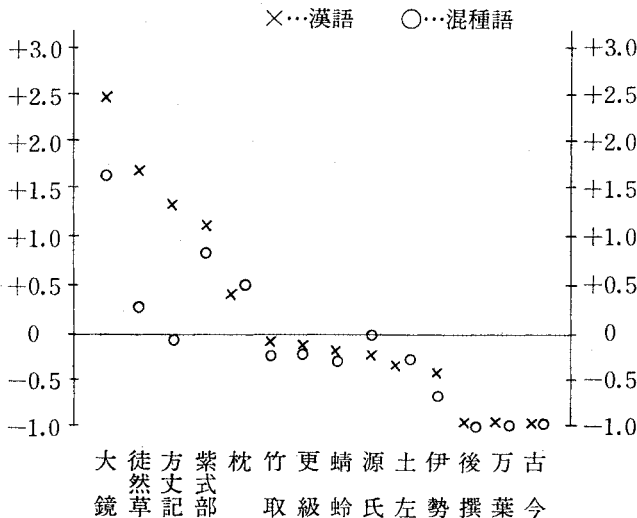
入っても増加したがその後やや停滞したと思われるのに対し、外来語はその後を埋める形で増加した」と考えられる。

しかし、このような見通しを実際の文献資料でどのように裏付けてゆくかは難しい問題である。というのは、同じ時代の資料であってもジャンルの異なるものであれば語種構造は異なっていて、語種を決める最大の要因は時代的な違いではなくて資料の性格による文体的な違いであると考えられるからである。

語種の量的構造について調査したものにもいろいろあるが、古典作品の調査を行ったものには宮島達夫の整理がある<sup>(27)</sup>。私もこの調査を私なりに利用して考えてみたので、以下にその概略を示すこととする。

拙論では、田中章夫の言う期待値偏差（漢語・混種語の使用率が期待される使用率からどのくらいずれているかを示す）を調べてみたが、ここでは図にしたものを示す。

これを見ると、『古今集』、『万葉集』、『後撰集』はほぼ類似的の性格を示している。歌集であるから当然のこととも言え



るが、漢語・混種語がほとんど使われていない。また、『伊勢物語』、『土佐日記』、『源氏物語』、『蜻蛉日記』、『更級日記』、『竹取物語』がほぼ相似た傾向を示し、いわゆる仮名文学作品の中では、『枕草子』と『紫式部日記』とが漢語・混種語ともに期待値よりも高く、やや特異な位置を占める。一方、『方丈記』、『徒然草』、『大鏡』は、いずれも他の資料よりも漢語の使用率が高いのである。ただ、『大鏡』は漢語とともに混種語の使用率も高いのに対して、『方丈記』、『徒然草』では、混種語の使用率が『枕草子』、『紫式部日記』よりもかえって低いのである。なお、全体として異なり語数においての方が延べ語数においてよりも漢語・混種語の使用率が高いのである。このことは、使用順位の高いところに漢語・混種語が入りにくいことを示しており、漢語・混種語は平均して種々な語が少しずつ使われていることになる。

中世から近世にかけての資料については柏谷嘉弘の調査があり、近代の資料については飛田良文の調査がある<sup>(29)</sup>が、単純に時代が後になると漢語の比率が変わると言えない。『英草紙』(巻一)では漢語の占める割合が四〇・四パーセントであるのに対し、<sup>(31)</sup>『雨月物語』(巻一)では一九・一パーセントであって、その違いはきわめて大きい。同様なことは、飛田良文の調査した『花柳春話』においても言えることである。<sup>(32)</sup>『花柳春話』は、最初『欧州奇事花柳春話』として漢文直訳体の漢字片仮名交じり文で翻訳され、後に『通俗花柳春話』として和文体の漢字平仮名交じり文に翻訳し直されたのである。したがって、両者の漢語使用の頻度の違いは文体的な違いであるとも言えよう。

また、近代・現代の語種を考える場合には、一般に漢語として一括して扱うわけであるが、それらの中にはもともと中国で使われたものではなく、日本で作られた、いわゆる和製漢語の類も入っている。考えて見れば古典にお

ける漢語も呉音・漢音などによって性格の異なることが多く、単一のものとして扱うことが出来るかどうか問題が残る。外来語にいろいろなもののあることも今さら言うまでもない。その点では、混種語も成立の点からいうと様なものがあり一括して扱えるかどうかには問題がある。語種で分けると言うことは、かなり大雑把にとらえるということであって、細かな違いを捨象することになる。

以上述べてきたごとく、語種の量的構造は文体的に相違する面が多く、またその他の問題もあり、語彙史的な変遷として考えるためには検討すべきところが多いのである。たとえば、語彙史的な要因と文体的な要因とに分けて考えるような数理的・統計的処理の方法を確立するというような方向で考えられないものであろうか。あるいは、文体的な面の違いの少ない資料に限定するというようなことも考えられる。そのような点では国立国語研究所で『文芸春秋』の語彙の時代的な変遷を明らかにしたのは、<sup>(33)</sup>今後の一つの方向を示すものとして注目される。

## 五

これまで、異なり語数を主な対象とし延べ語数についてはあまり問題としてこなかったが、異なり語数と延べ語数との関わりも問題になってくる。異なり語数は、ある程度は資料の範囲を広くすると増えるが、それ以上は資料を多くしても次第に増え方が緩やかになり、一定の方向に収斂する傾向を示すのである。これに対して、延べ語数は当然資料の長さに比例して増加する。したがって、ある資料でどれだけ語彙が豊富・多様であるかは、異なり語数を考えることによっておおよその見当を付けることが出来る。同じ延べ語数の資料ならば、異なり語数の多い資料ほど語が多様に使われていることになる。どのように証明するかは難しいことであるが、一般的には時代とともに

に語彙が多様化する傾向があるものと思われる。

また、語ごとの使用率を調べ、どのような語が多く使われているか、どのような語が全体の中でどのように使われているかを考えることにより、時代的な変化を辿ることが出来る。つまり、使用頻度、使用順位の問題である。このようなことと関連して、使用数を累積していつてその使用順位までの総語数が全体の語彙の中でどのような比率を示すかという図を作ることがある。資料、時代により異なるところがあるが、どのような資料を調査しても一般にジップの法則と呼ばれる逆L字型の図になり、時代的な差を示せるかどうか問題である。一方、使用順位ごとに使用頻度を棒グラフにしたり、百位、二百位など区切りを付けてそこまでの累積を対照した表を作ったりすることも行われている。しかし、これらの方法が国語語彙史研究にどういう意味を持ちうるかについての検討をするところが先になろう。

全体の語彙を対象にするというのではなく、使用頻度の高いものだけを対照することも考えられる。助詞・助動詞を調査の範囲に入れるとすれば、それらの中には他の語彙よりも上位にくるものが多い。助詞も「において」「でもって」など複合助辞を一語と数えれば時代とともに増えてくるが、「も」、「の」、「は」など基本的な助詞は上代から現代まで重要な位置を占め続けている。これに対して、助動詞の方は助詞以上に変化が著しい。ただ、この場合も「てしまう」、「ている」などの複合助動詞の認定に困難があり、どのようにして量的変化を考え語彙史の中に収めることが出来るか問題である。西欧語などとの対照研究においては助詞・助動詞も考えるべきであるが、国語語彙史の量的構造の研究では、助詞・助動詞は別に扱うべきであろう。

一般の語彙の中でも、「あり」(ある)、「いふ」(す) (する) などの動詞、「これ」、「それ」などの代名詞、「こ

7	8	9	10	11	12	13
いも 1.03	(人)	(われ)	(こふ)	(おもふ)	(あふ)	(ゆく)
もの 1.48	この 1.44	みる 1.35	申す 1.31	なし 1.19	のたまふ 1.15	おきな 1.05
す 1.92	おもふ 1.70	よむ 1.34	なし 1.08	みる 1.07	いと 1.01	(この)
わが 1.40	す 1.39	もの 1.24	心 1.17	秋 1.08	(鳴く)	(山)
よむ 1.63	ふね 1.60	ところ 1.60	もの 1.17	こと 1.14	みる 1.12	(或)
す 1.45	心 1.41	わが 1.21	身 1.17	花 1.10	秋 1.10	きみ 1.03
こと 1.78	なし 1.48	ほど 1.47	なる 1.12	みる 1.10	ものす 1.02	もの 1.00
こと 1.36	をかし 1.28	いみじ 1.04	(おもふ)	(なし)	(ほど)	(みる)
す 1.47	おもふ 1.19	(もの)	(おぼす)	(みる)	(ほど)	(この)
はべり 1.05	心 1.00	(もの)	(いふ)	(おもふ)	(ほど)	(との)
みる 1.34	いと 1.31	いみじ 1.13	おもふ 1.02	(この)	(やう)	(ほど)
いと 1.24	人 1.12	(はべり)	(なる)	(また)	(宮)	(いふ)
(これ)	(なし)	(その)	(いふ)	(おもふ)	(この)	(たてまつる)
その 1.07	(もの)	(あるいは)	(これ)	(しる)	(また)	(世)
もの 1.54	(心)	(その)	(おもふ)	(しる)	(みる)	(よし)
(花)	(春)	(山)	(みる)	(風)	(露)	(道)
心 1.22	なし 1.05	山 1.01	(うし)	(風)	(しる)	(おもふ)
(二)	(ある)	(その)	(もの)	(十)	(三)	(この)

集』は山内洋一郎「連歌語彙の構造」(『国語語彙史の研究』第七輯)による。『現代達夫『古典対照語彙表』による。

	1	2	3	4	5	6
万葉	わが 1.94	みる 1.59	あり 1.50	きみ 1.48	す 1.26	なし 1.03
竹取	いふ 2.87	あり 2.30	こと 2.11	す 1.89	人 1.84	かぐや姫 1.58
伊勢	あり 3.16	をとこ 2.89	人 2.50	むかし 2.15	をんな 1.95	いふ 1.93
古今	人 2.35	あり 1.76	おもふ 1.63	みる 1.58	なし 1.53	花 1.46
土佐	いふ 3.55	あり 2.95	人 2.28	す 1.86	この 1.75	うた 1.63
後撰	あり 1.83	みる 1.79	なし 1.77	人 1.77	おもふ 1.61	もの 1.46
蜻蛉	あり 4.54	す 2.22	いふ 2.08	おもふ 1.98	人 1.96	いと 1.95
枕	あり 2.32	いふ 2.24	いと 2.17	人 2.04	す 1.99	もの 1.63
源氏	こと 2.31	あり 2.14	いと 2.04	人 1.80	心 1.64	なし 1.61
紫式部	人 2.16	いと 1.69	す 1.67	こと 1.59	あり 1.26	なし 1.18
更級	あり 2.33	人 1.85	す 1.77	いふ 1.66	なし 1.44	こと 1.35
大鏡	こと 2.46	この 1.73	おはします 1.59	す 1.56	申す 1.39	あり 1.36
平家	たまふ 1.86	す 1.66	あり 1.41	さうらふ 1.37	申す 1.18	こと 1.04
方丈記	あり 2.02	す 1.86	人 1.82	こと 1.78	なし 1.74	心 1.15
徒然草	人 3.34	こと 3.14	あり 2.86	す 2.10	いふ 2.07	なし 1.78
千句連歌	月 1.53	人 1.22	秋 1.19	身 1.12	心 1.03	(なし)
新撰 菟玖波集	月 2.12	花 1.84	人 1.67	身 1.41	秋 1.31	見る 1.27
現代雑誌 九十種	する 2.98	いる 1.73	いう 1.43	一(イチ) 1.14	こと 1.11	(なる)

『平家物語』は金田一春彦他『平家物語総索引』による。『千句連歌』、『新撰菟玖波雑誌』は、国立国語研究所『現代雑誌九十種の用語・用字』による。その他は、宮島



と、「もの」などの形式名詞は、いつの時代においても上位にきていて、あまり時代的な変化が認められない。一方、人名、地名など、ある資料にだけ多く現われるような語彙も時代を反映するものとは言えない。異なり語数と延べ語数とを考え合わせ、どういう語彙が基本的なものであるかを明らかにし、それらの中から時代的な様相を象徴する語彙を見出す方法を考えることが必要であろう。ここでは、一つの見通しを示すというに過ぎないが、これまでの研究を参照し、資料の語彙量中パーセント以上の使用率のあるものを中心として示したのが前の表である。もちろん、パーセントということに明確な理由があるわけではないが、その資料の中でもっとも重要な部分を占める語彙であるということは言えよう。

これらを全体として眺めてみると、「す」(する)、「いふ」、「あり」(ある)などの動詞は全時代を通じて多く使われている。「みる」、「おもふ」は古代ではかなり多く使われているが、『現代雑誌』では前者が二十七位、後者が二十九位と低くなっている。古代においては広く「みる」、「おもふ」と言っていたのが、現代ではやや細かに言い分ける傾向があるためであろう。「申す」、「のたまふ」、「はべり」、「おはします」、「さふらふ」などの敬語動詞は古代に多いものであるが、時代的な差とともにそれぞれの間の文体的な差も考えてゆかねばならない。

「こと」、「もの」などの形式名詞は古代から現代まで広く使われている。これに対して、「人」、「心」は『現代雑誌』ではかなり使用順位が下がってくる(特に「心」は百位以下となっている)。これらもあるいは他の語を使つて細かに言い分ける傾向が生じたためかもしれない。名詞の中でも、「花」、「月」、「秋」、「身」などは特に歌集・連歌集で使用率が高く、歌われる内容と関わりの強い語と考えられる。『現代雑誌』では、「一」、「二」、「三」などの数詞が多く使われているが、これも古代でも数詞を多く使う資料があり、内容による差かもしれない。

一パーセント以上の使用率のある語は、『新撰菟玖波集』の九語を除くと、時代とともに減る傾向が窺える。統計的にはいろいろな問題があり早急な結論は出せないが、古代においては少数の語彙が繰り返し用いられる傾向があったのではあるまいか（古代においては使いうる語彙の範囲が少なかったのに、現代に近づくほど種々な語を多様に使い分けるようになったのかもしれない）。その他、個々に問題になるところも多い。たとえば、「あり」は『蜻蛉日記』、『伊勢物語』で多く、「いふ」が『土佐日記』で、「人」が『徒然草』で多いなどのことである。これらの語はその作品のキーワードと言うことが出来る。

いずれにしても、使用順位の高いものを対象として考えることは、文体的な違いと時代的な違いを見分けるのに都合がよく、計量的な国語語彙史研究の中ではもっとも考えやすい方法のように思われる。ここでは触れなかったが、資料同士の相関を考え文体的特色と時代的な特色とを見分けてゆくというような方法も可能と思われるのである。

## 六

計量語彙論と国語語彙史研究との関わりについては、なお考えるべき問題が多い。いずれにしても、現段階では、現代語の語彙の計量語彙論的な研究は盛んであるがその成果は国語語彙史研究には及んでいないし、古典語の計量語彙論的な研究には文学作品の文体的な特色を明らかにするのに役立つに留まっていると言うことが出来る。本稿はこれまでの研究を整理し、その特色と問題点を明らかにしようとしたもので新しい研究法を提出するものではない。その点では、学界展望、もしくは国語学史研究に属するものである。計量的国語語彙史研究の出発点

となることを考えたのである。

# 注

- (1) 前田富祺『国語語彙史研究』の第三部第三章「語彙の体系とは」を参照。
- (2) 田中章夫『国語語彙論』の第一章「語彙と語彙論」他を参照。
- (3) 注1に挙げた拙著他を参照。
- (4) そのような国語語彙史研究の流れは、国語語彙史研究会『国語語彙史の研究』の第一輯（昭和五十四年刊）から第九輯（昭和六十二年刊）に至る論集の論考によって窺うことが出来よう。
- (5) 前田富祺「語彙史」『国語学大辞典』所収。
- (6) この部分は、昭和六十三年十月刊行予定の『言語学大辞典』の第二巻『世界言語編（中）さゝの』の「日本」のところに所収予定である。
- (7) 田中章夫「作品の語彙の偏りを測る」『国語語彙史の研究』第四輯）などを参照。
- (8) 中野洋「単語の数はどのくらいあるか」『新・日本語講座1現代日本語の単語と文字』所収）を参照。
- (9) 注2の著書を参照。
- (10) 昭和五十八年刊。
- (11) 大野晋「基本語彙に関する二、三の研究——日本の古典文学作品における——」『国語学』24）は昭和三十一年に発表された。以後の大野晋の研究も合わせて、大野晋の語彙研究の主なものは大野晋『文法と語彙』に再録されている。
- (12) 樺島忠夫「現代文における品詞の比率とその増減の要因について」『国語学』18）が昭和二十九年に、同「類別した品詞の比率に見られる規則性」『国語国文』24—6）が昭和三十年に発表されている。
- (14) 水谷静夫「大野の語彙法則について」『計量国語学』35）、同「数理言語学」の十三頁以下を参照。また、水谷静夫『朝倉日本語新講座2語彙』の九十頁以下を参照。
- (15) 宮島達夫『古典対照語い表』巻末などを参照。

- (16) 山口仲美「平安仮名文における形容詞・形容動詞」(『国語語彙史の研究』第一輯)を参照。
- (17) 神尾暢子『王朝語彙の表現機構』を参照。
- (18) これらの研究については、阪倉篤義編『講座国語史3 語彙史』でまとめられているので、ここでは一々について触れることはしない。
- (19) 大野晋「基本語の古さ」(『講座・現代国語学』Ⅲ)を参照。
- (20) 阪倉篤義「万葉語彙の構造」(『万葉』34)を参照。
- (21) 伊牟田経久「源氏物語名詞語彙の構造」(『佐伯梅友博士古稀記念論集』所収)を参照。
- (22) 浅見徹「古代の語彙Ⅱ」(『講座国語史3 語彙史』所収)を参照。
- (23) 前田富祺・前田紀代子『幼児の語彙発達の研究』を参照。
- (24) 山内洋一郎「連歌語彙の意味構造の図式化―体の類について―」(『国語語彙史の研究』第七輯)は、連歌という点に問題はあるが、そのような試みをする場合の出発点としては参考になるかもしれない。
- (25) たとえば、前田富祺「語彙の体系について」(『東北大学教養部紀要』19)、同「語彙に体系はあるか」(『新・日本語講座2 現代日本語の単語と文字』所収)などを参照。
- (26) 荻野綱男「シソーラスについて」(『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究』5)を参照。
- (27) 宮島達夫「古典対照語い表」、また、同「総索引への注文」(『国語学』76)を参照。
- (28) 前田富祺「語種構造の漸移相」(『日本語学』3-9)を参照。なお、このような語種構造の研究には、築島裕、飛田良文等、古代から近代にわたっているいろいろなものがあるが、前記拙論に挙げてあるので、ここでは省略する。
- (29) 柏谷嘉弘「漢語について」(『講座日本語学』1)を参照。
- (30) 飛田良文「近代語彙の概説」(『講座日本語の語彙6 現代の語彙』所収)を参照。
- (31) 注29に同じ。
- (32) 注30に同じ。
- (33) 国立国語研究所『現代語の変遷』を参照。